ふるさと探訪

第一部・猿橋物語

＜5＞

決着つかぬ文献

地名が先か 橋が先か……

生い立ちは伝説のかなたにあって、ようとして知れない猿橋。だが、中世にはいると各種の文献、史料にその名が登場するようになる。

最も古いのは、南都留郡大嶺村（いまの足和田村）の蓮華寺仏像名にある「嘉祿二年（一二二六）、仏所加加守 猿橋 住人なり」との記述。もっともこれだけでは橋があったのか、単なる地名なのか不明。「地名が先か、橋が先か」の論議は、いまだに決着を見ない。

十五世紀、室町時代になって有名な〝猿橋合戦〟が起きる。

応永二十三年（一四一六）、当時の甲斐国守武田信満は、しゅうとにあたる関東管領上杉氏憲（禅秀）から鎌倉公方（くぼう）足利持氏を討つべしとの密使を受けて兵を挙げた。甲斐の国守とはいってもさしたる兵力もない武田方は、それでも討手の上杉憲宗の大軍と、天然の要害・猿橋をはさんで二年間も戦った。（東京彦著「伝説と怪談」から）

これは鎌倉大草紙などに見える戦記で、十年後の応永三十三年には「一色刑部大輔持氏一千騎にて発向したが、武田 信長（信満の息子）、猿橋にて防ぎ、持氏旗を巻く」との趣旨の記述もある。

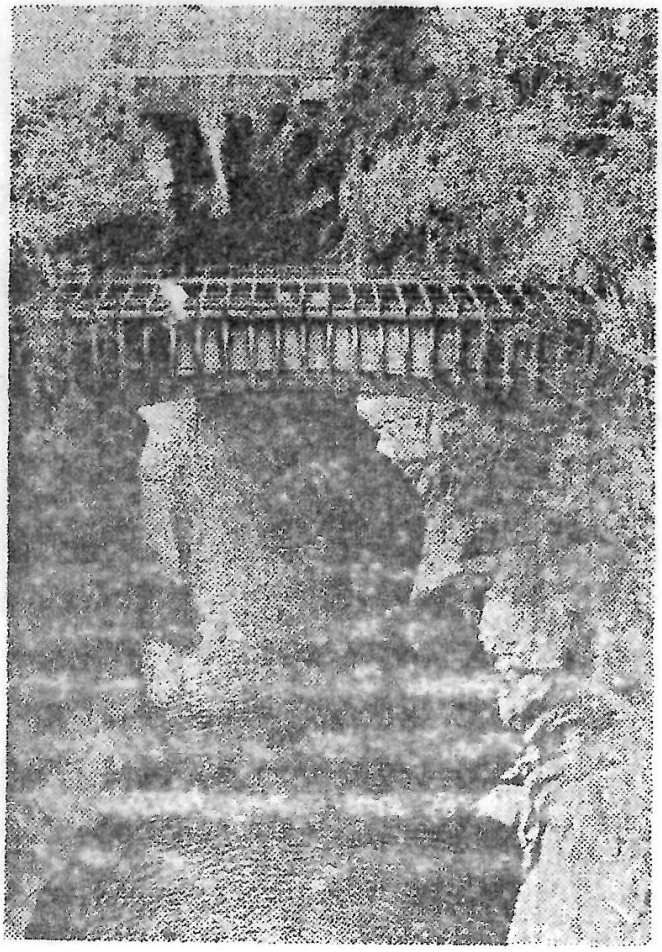
「甲斐は山けわしく、谷が深い。軍兵はいずれ劣らぬ猪武者」（同書）と幕府方をおそれさせた猿橋合戦からほぼ百年後。享禄三年（一五三〇）には、上杉憲房との一戦に、武田信虎（信玄の父）が小山田越中守信有ら一万八千騎を猿橋に集結させたとも伝えられている。

甲州の要路、猿橋は昔から合戦の舞台だった。そのころには単なる地名でなく、橋がかかっていたことが、次のような史料で裏付けられる。

応仁の乱後の文明十八年、聖護院道興が東国巡歴の折に記した旅日記「回国雑記」には「猿橋とて川の底千尋（ちひろ）に及び待る上に三十余丈の橋を渡して待りけり。この橋に種々の説あり。昔、猿の渡しけるなど里人の申し待りき……」とある。この時、道興は橋詠かの歌を残している。その一首。

谷深き　そはの岩ほの　猿橋は　人も梢を　渡るとそみる

もっとも当時の猿橋がどんな形の橋だったのか、うかがい知るすべもない。いまの奇抜な構造が明らかになるのは、ずっと後の江戸時代になってからである。



猿橋付近の桂川渓谷。その昔は合戦の舞台にもなった（現在の甲州街道・新々猿橋から撮影）